

## 「結局、マレーシアは高所得国入りしたのか」

熊谷 聡

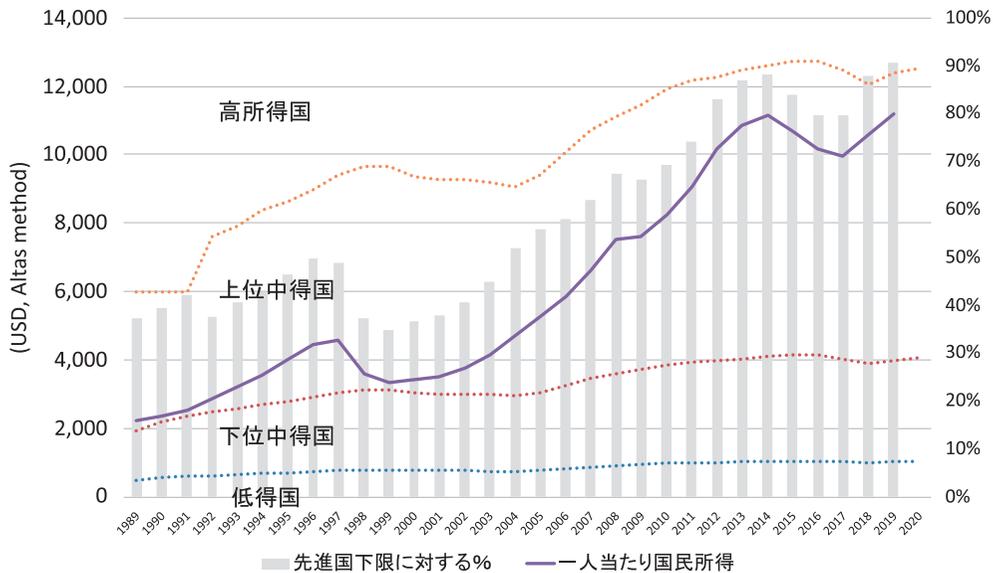
アジア経済研究所の熊谷と申します。先ほど、穴沢先生から Wawasan2020 は経済分野に限った目標ではなかったという話をいただきましたが、ここでは、一番注目されている高所得国入りの目標に焦点を絞ってお話をさせていただきたいと思います。

マハティールの Wawasan2020 は、1991 年から 2020 年まで平均 7% の経済成長を 30 年間続けて経済規模を 8 倍にすることで先進国入りを果たすという目標として始まったのですが、その後、ナジブ政権下でリバイバルされ、2020 年までに一人当たり所得で 15,000 米ドルを超えることが新たな目標として設定されました。その後、いつの間にか世界銀行の基準において高所得国の定義となっている 12,000 米ドル前後の水準を越えることが目標となったわけです。

それが結局、どうなったのか、いきなり答えあわせですが、どうも無理だということになりました。2019 年時点でドル建てのマレーシアの 1 人当たり所得は世銀の計算方法では 11,200 米ドル、これに対して高所得国の下限は 12,376 米ドルということで、直近で高所得国の下限に対して 91% の水準まではいったのですが、残念ながら高所得国入りできていないというのが現状です（図表 1）。2020 年は新型コロナウイルス感染症の影響で、もしかすると世界経済の状況が悪くて高所得国の基準の方が下がってきて…という可能性がゼロではないのですが、おそらくマレーシア経済もマイナス成長は不可避で、2020 年の目標達成はできないと考えております。マレーシアは中所得国の罠に陥っているというようにも言われますけど、実は特に 2000 年代以降、マレーシアの米ドル建ての所得というのは上位中所得国の中で割と順調に上がって、惜しいところまではいったということです。ただし、目標達成は 2020 年の段階ではできなかったということになるのではないかと思います。

これから、本当にマレーシアの経済構造は高度化したのかということについて貿易の面からお話をしたいと思います。よく中所得国の罠、すなわち、「中所得国というのは高所得国よりも技術水準は低いし、一方で低所得国よりは賃金は高いので国際競争力を失う」という議論がここ 10 年くらい活発に行われてきました。マレーシアも中所得国の罠に陥っている、陥っていないという議論の対象となる国です。これは定義次第ですが、マレーシア政府は 2010 年に発表された NEAC のレポートの中で、一旦、自国は罠に陥っていると認めています。

今回は輸出構造の面からみて、マレーシア経済がこの 20~30 年で高度化してきたのかということを確認したいと思います。ここでは EXPY という指標を使いますが、ここで



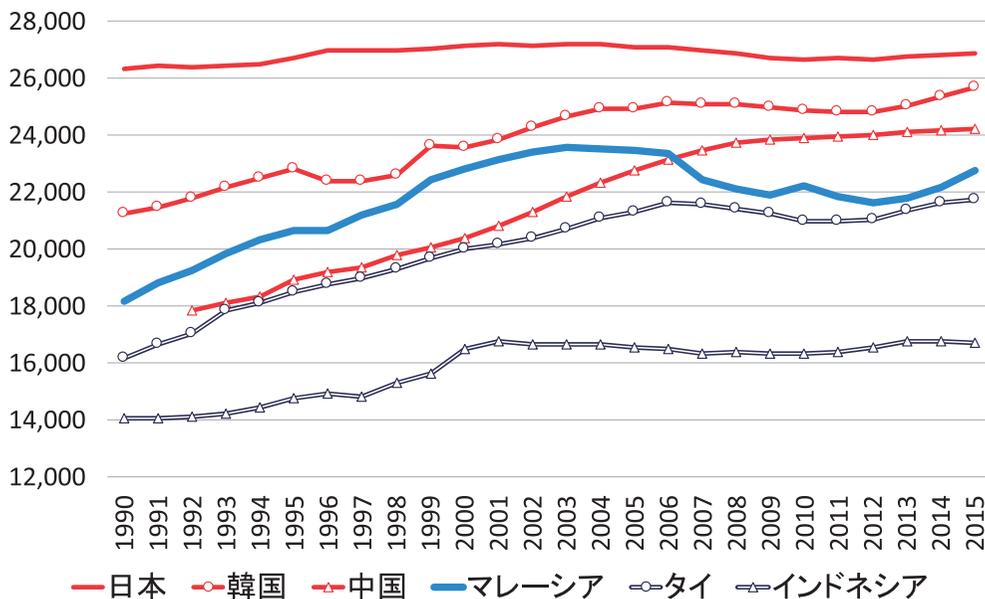
図表1 米ドル建てで見たマレーシアの一人当たり国民所得（GNI）と世銀による所得カテゴリーの推移

(出所) World Development Indicators 等より筆者作成。

は、これは輸出高度化の指標で高いほどよい、輸出単価に似た指標であるとイメージしていただければと思います。図表2は1990年から2015年までの東アジア各国のEXPYの推移で、日本は一貫して高いことが分かります。逆にインドネシアは一貫して最も低いです。その間に4つの中所得国があるのですが、韓国は割と順調に高度化が進んでいて、EXPYは日本に迫る高さになっています。一方でマレーシアはどうかというと、1990年代は高度化が進んでいるのに2000年代に入ると頭打ちになり、伸びが止まっているように見えます。2000年代半ばには中国に抜かれており、やはりこの辺から輸出の高度化に伸び悩みが見られるということになります。

では、なぜこのようにマレーシアの輸出構造の高度化が伸び悩んでいるのでしょうか。ここでは輸出を生産ステージ別の5つのカテゴリーに分けて分析します。資本財、部品、消費財、一次産品、加工品という5つのカテゴリーで、図表3のような分類になっています。この生産ステージ別に高度化の度合いを見ると図表4のようになっています。数字が大きいほど財が高度であるということになります。生産ステージごとに見ると一次産品が一番低くて、消費財、加工品、部品とより高度になり、資本財は25,000近辺でもっとも高度な財といえます。例えば、一次産品というのは、タイだけ少し低く、これは米などが多いためだと思うのですが、どの国が輸出しても大体程度が低いと決まっています。一方で、資本財は多少の差はあっても、どの国が輸出しても結構程度が高いもので、部品についてもそういう傾向があります。

一方で面白いのが消費財で、消費財というのは国によって高低に差があって、例えばインドネシアが輸出している消費財というのはインドネシアの一次産品とあまり変わらない



図表2 東アジア各国のEXPYの推移

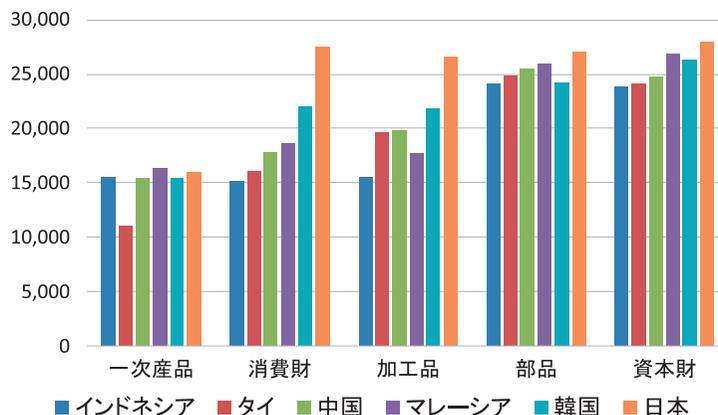
(出所) 熊谷・黒岩 (2020)

	ステージ	BEC分類	品目の例
CAP	資本財	41,521	産業機械、商用車
PRT	部品	42,3	半導体、自動車部品
CON	消費財	112,122,5 1,522,61,6 2,63	食品、乗用車、家電、衣類
PRM	一次産品	111,21,31	穀物、原油、ゴム
PCS	加工品	121,22,32	パーム油、化学製品、鉄鋼、セメント

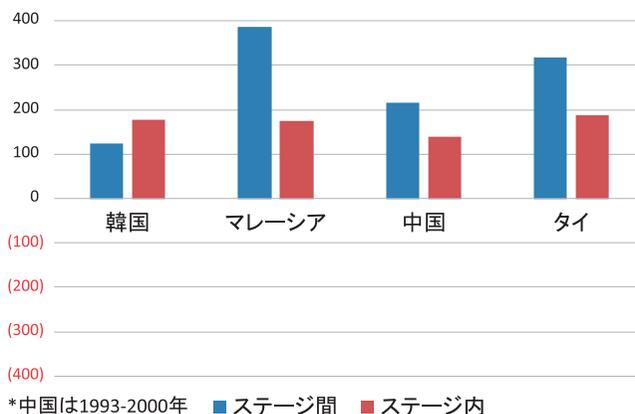
図表3 輸出品の生産ステージ別5分類

(出所) RIETI-TID に基づいて筆者作成。

高度化の程度です。一方で日本が輸出している消費財というのは、どちらかという資本財や部品に近いような高度な消費財です。このように見ると、輸出の高度化には2パターンあり、1つは一次産品輸出国が消費財、加工品、部品、資本財と生産ステージをまたいで大きく高度化していくというパターンです。もう1つは、同じ消費財を輸出しているのだけれども非常に程度の低い消費財から同じ消費財の中でも高度なものを輸出するようになるというステージ内での高度化というものです。ステージ間をまたいだ大きな高度化とステージ内での地道な高度化という2パターンがあります。



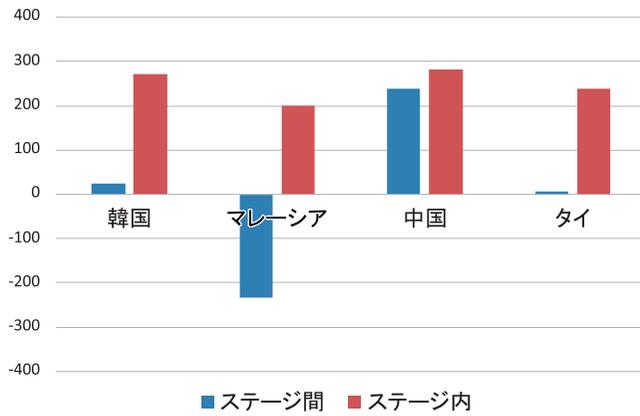
図表4 生産ステージ別のEXPY (2000年)  
(出所) 熊谷・黒岩 (2020)



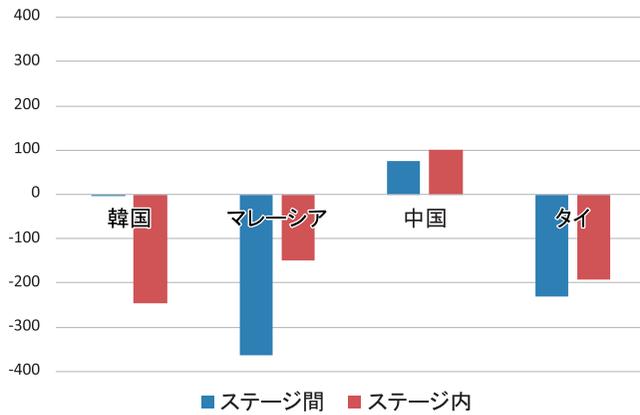
図表5 EXPYの変化要因 (1990年～2000年)  
(出所) 熊谷・黒岩 (2020)

図表5のように1990年代を見るとマレーシアは実はステージ間の高度化がすごく進んでいて、同時にステージ内での高度化も進んでいます。ステージ間で高度化が進んでいるのは一次産品から製造業への輸出のシフトによるものだと思いますが、同じ生産ステージ内でも地道に高度化は進んでいました。

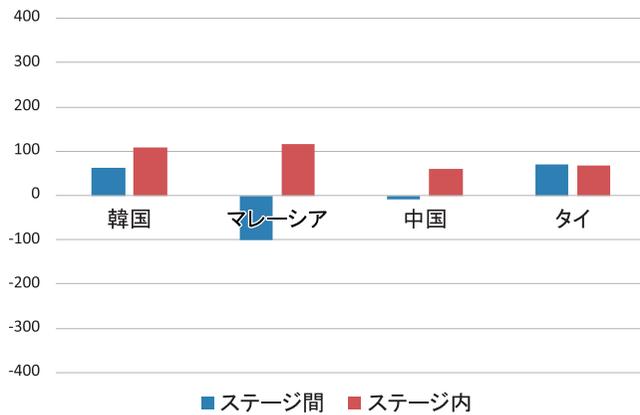
ところが図表6のように、2000年代を越えたあたりに何が起こったかという、ステージ内での高度化は地道に進んでいるのに、ステージ間で高度化の逆が起きている。つまり、脱工業化というか、一次産品の輸出がどんどん伸びて、それまでは製造業品、消費財、部品といった輸出が伸びていたのに、一次産品中心の輸出に逆戻りしていて、ステージ内での地道な高度化を帳消しにしてしまっている。図表7は世界金融危機時の変化なのですが、マレーシアの場合、ステージ間、ステージ内ともに大きく高度化の度合いが下がっています。一方で、中国などは世界金融危機下でも高度化が進んでいます。図表8のように、世界金融危機後は、どの国も高度化の進み方が遅くなっているのですが、マレーシアはス



図表6 EXPY の変化要因 (2001年～2007年)  
(出所) 熊谷・黒岩 (2020)



図表7 EXPY の変化要因 (2008年～2009年)  
(出所) 熊谷・黒岩 (2020)



図表8 EXPY の変化要因 (2010年～2015年)  
(出所) 熊谷・黒岩 (2020)

テージ内では地道に高度化している一方、ステージ間で見るとやはり高度化の逆が起こっている。これは、一次産品やその加工品、例えばパーム・オイルなどに輸出の重心が移っていて、せっかく同じ消費財の中ではより高度なものを輸出するような高度化は進んでいるのに、国全体としてはそれを帳消しにしている傾向が見て取れます。

マレーシアはなぜ輸出の高度化が遅いのかという点、1つは、いわゆる『資源の罨』で、天然資源が豊富であるということが裏目に出ている。資源があることが製造業の高度化を阻んでいる面があるということが1つ。もう1つが製造業分野での、“Home-grown MNC”と呼んでいますけど、自国で育ったMNCの欠如です。例えば資源分野でペトロナスなどはマレーシア発の多国籍企業なのですが、製造業企業において多国籍化しているマレーシアの企業は、トップ・グループなどの資源利用型の一部企業は例外として、数も少なく規模も小さい。そうすると何が起るのかというと、グローバルバリューチェーン（GVC）に参入はできるがその中で付加価値が高い部分を自分たちが主導権を取って受け持つことができない。ヘッドクォーターが他の国にある多国籍企業に「この部分を担当しろ」と言われた場所を越えて高度化することが非常に難しい。つまり、生産ステージを跨ぐような大きな高度化を起こしにくいような状況にロックインされていると言えるのではないかと思います。

マレーシア経済の今後の見通しですが、高度化にやや難ありとは言っても順調に所得水準が伸びてはいるので、COVID-19の影響は当然あるのですが、それでも2020年代中盤にはおそらく高所得国入りするだろうと思います。理由としては、1つは民間消費が非常に強い。これはタイとの大きな差です。マレーシアは人口ボーナス期で若い人の人口が多い時期に入っている。また、歴史的に所得格差の対策をやっているため、民間消費が経済を支えている。それから、最近の傾向としては、マレーシアは米中対立の受益者になる可能性がある。COVID-19の影響を受けた、2020年6月から9月の輸出を見てみると、対米輸出は25%増で、消費財が中心に伸びています。対中輸出は31%増、素材中心に伸びているということで、どうやら米中両国と良い貿易関係を築いて、しかもそれぞれに対して異なる財の輸出が伸びているということで、米中間で良いポジションを得つつあることが、コロナ禍でも好調な輸出に現れているということになります。

最後に、マレーシアは早晚高所得国入りはするけどその先はどうなるのか、ということですけども、どうも高位高所得国、例えば北欧など、5万ドルとか7万ドルとかというような1人当たりの所得を達成する見通しはまだ立ちません。15,000から20,000米ドルくらいまではおそらく今の延長線上の経済構造や経済政策でもいけそうですが、その先については、やはり製造業分野での自国発の多国籍企業が少なく、世界最先端の研究開発をやって付加価値をとっていくというような部分へマレーシアがいけるかということ、まだそこに至る道はついていないということになるのではないかと思います。

〈参考文献〉

熊谷聡・黒岩郁雄. (2020). 東アジアにおける輸出構造の高度化——中所得国の罨へのインプリケーション——. *アジア経済*, 61(2), 2-35.

National Economic Advisory Council (NEAC) [2010] *New Economic Mechanism for Malaysia, Part 1*.

(くまがい・さとる アジア経済研究所)